選抜試験と高校調査書

国立大学の殆どで，この項目についての調査を実施している。各大学では調査項目の中から，主要なもの3―5項目をキーワードに選んでいるが，これをその一つにあげている大学は，今年度は30大学に及んでいる。いずれの大学でも，これに関する調査内容は，高校調査書成績（評定平均値または成績概評）と共通第1次学力試験及び第2次試験成績との相関並びに調査書成績と大学合格率についてのものが多い。多くの大学では，この調査と同時に，高校調査書と大学入学後の成績との関連も調査している。

この調査の具体的な目的の一つは，最近推薦入学を実施する大学・学部が増えてきているが（昭和59年度は70大学，116学部が実施。昭和60年度は76大学，138学部の予定），このための基礎資料を得るためと見受けられる。すなわち，学力検査試験を行わない場合，受験生の学力判定の殆どは高校調査書に頼らざるを得ないからであり，これが入試選抜試験に代わる資料となり得る保証が必要である。したがって，高校調査書と選抜試験との関連のみならず，入学後の成績との係わりあいを，通常の入学試験による入試成績と入学後の成績との相関調査結果などと比較する必要もある。これらの調査研究の内，後者の調査を実施することが出来るようになったのは，共通第1次学力試験制度以降の入学者がすでに2年にわたり卒業し，調査に必要なデータが蓄積されてきたからである。

この中から一般的な傾向について述べてみる（以下では，特に断わらない限り，高校調査書または高校成績との関連を指す）。

大学合格率は高校での成績が良い者ほど高いことを，すべての大学で指摘している。この指標としては，評定平均値または成績概評が用いられている。ただし成績が良い者でも100％合格の例はない。評定平均値と合格率との回帰直線を求めている大学もあって，毎年ほぼ一定した傾向が示されている。現役と浪人の比較では，成績概評Aでは現役の，B・Cでは浪人の合格率が高いことが指摘されている。

入試成績との相関係数調査では，入試の総合点を用いた調査は当然であるが，共通1次総得点や2次総得点との相関，さらには高校での各教科成績と，それに対応する入試各教科との相関調査も多く実施され，これらの中では入試総合点との相関が比較的高く，教科単位での相関では，外国語の相関が最も高いことを指摘する例が多い。その他の教科での値やその順序は大学により異なるが，その大学の性格，2次試験教科，学部・学科の種類，すなわち学問分野による受験者集団の属性の違いに起因するのかも知れない。このほか，浪人に比べ現役の相関が高くなっていることを示している大学がある。

また，同一高校内では相関が高くなることから，高校間格差の存在を指摘し，これを定量化する試みもある。しかし一方では，高校間格差

はあるが，成績概評Bが他の高校の概評Aの入試成績を上回らないという結果も得ている。

ただし，この相関係数の値は，一般的に共通1次学力試験と2次試験とのそれと比べて半分以下となっている。ただ，高校成績と入学後の成績（以下在学成績と言う）との相関は，入試成績と在学成績との相関よりも高い場合が多く，この点から，内容的検討抜きの調査書軽視を戒める意見がある。

高校調査書成績と在学成績との相関調査の結果は，入学試験成績と在学成績との相関よりも高くなることを，この調査を実施したすべての大学で指摘している。この値は，高校成績と入学試験との相関係数の年次変動の割合と較べて，毎年比較的安定していることも示されている。さらに，これを現役入学者と浪人入学者とに分けて比較した場合は，現役の相関係数が高くなることを示す大学もあって，浪人入学者ではその期間中受験勉強に専念した度合いが高校成績の良否を上回っているのではないかとの推察を行っている。

この他，入学辞退者，休・退学者の高校成績調査を実施した大学や，留年・退学者は成績概評C以下の者に多く(20～25%)，この中でも2年以上の留年と退学者の30～40%を占めていることを示した報告もある。上で高校成績と在学成績との相関の年次推移は比較的安定していると述べたが，留年せずに卒業した者だけで，この相関を求めると更に安定している。

昭和51年度から58年度までの高校成績と入試成績及び在学成績との相関調査の例がある。入試成績との相関は年ごとに高くなる傾向がみられ，また，昭和57年および58年卒業生（すなわち共通1次試験制度実施前年度と初年度入学生）の在学成績とのそれは両年度の間で急激な変動があること（大幅に高くなった学部と，大きく低下した学部とがある）を示していて，入学生の質的な変化を危惧している。ただ1年度だけの結果のみで早計に結論は出せないが，このような急激な変化については，今後，さらに追跡を続ける必要があろう。

特異な調査例として，面接試験の評価点と学力試験総得点，共通1次試験得点及び高校成績との相関調査の報告がある。共通1次試験第2年目からは学力試験成績との相関は認められないが，高校成績との相関は高く，年次変化がないことを示し，その理由として，2年目からの面接方法の安定化と，面接は一時的な学力試験では計れない面を検査しているとしている。

このように，共通1次試験制度が実施されてからの卒業生も出て，データの蓄積も出来てきたので，各種の調査はその緒についたばかりであるが，今後さらに充実した調査結果が得られるものと期待でき，それによる入試方法の改善や多様化が計られよう。ただ，在学成績との相関調査では，各学部，各学科が，それぞれ独立しているため，すなわち学科ごとに成績が付くので，正しい実態を知るのが難しい，なんらかの方法で，その規格化が必要である。